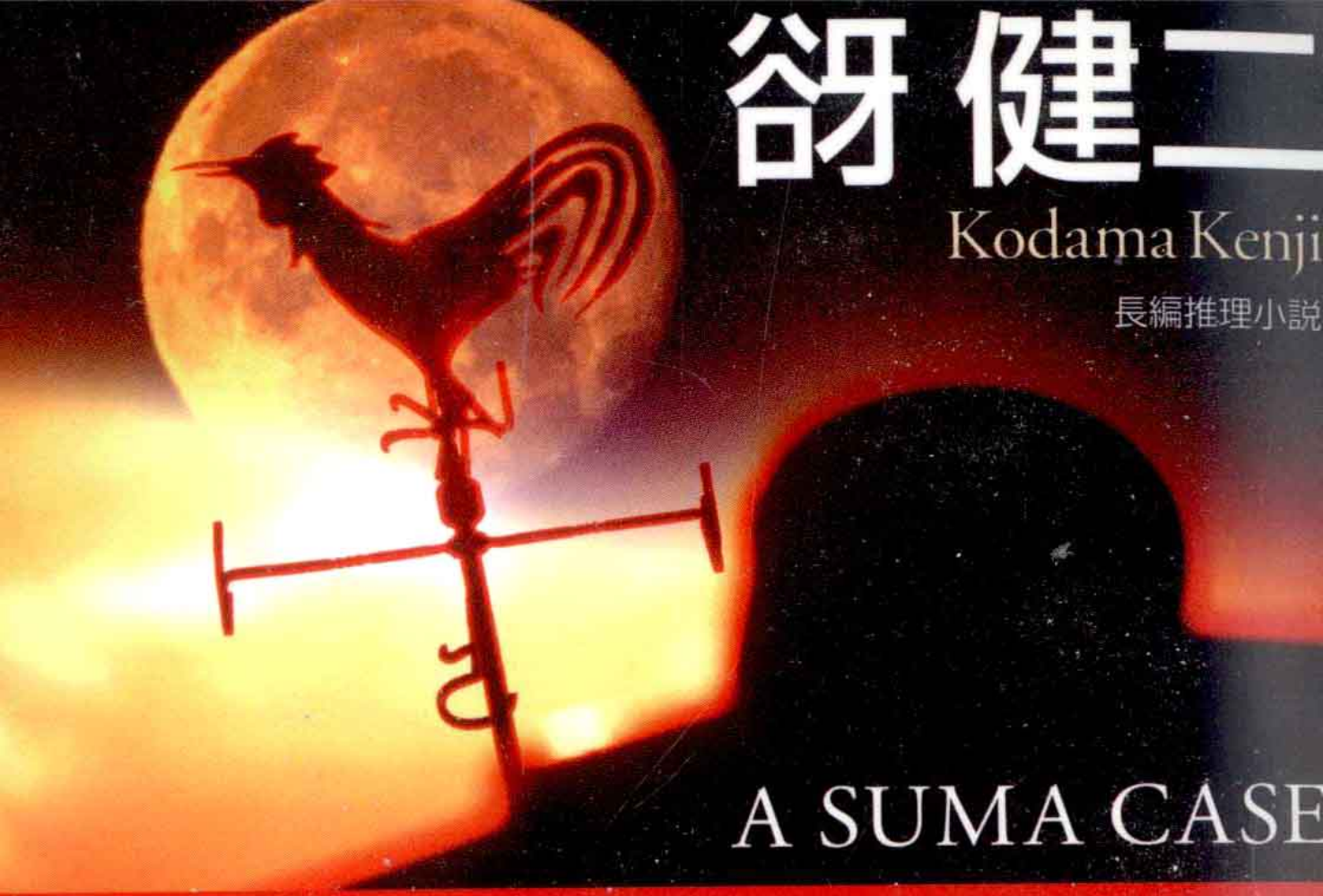

谺健二

Kodama Kenji

長編推理小説

A SUMA CASE

赫い月照

あかいげっしょう

光文社文庫

光文社文庫

長編推理小説
赫い月照
著者　毋健二

2005年5月20日　初版1刷発行

発行者　篠原睦子
印刷　堀内印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話　(03)5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Kenji Kodama 2005

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73875-3　Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

江苏工业学院图书馆
藏书章

長編推理小説

赫い月照

谺　健二

光　文　社

赫(あか)い月照(げつしょう)

目次

序章

1 異人の獅子 …… 9
2 首喰いの石 …… 24

CRACK 1 …… 40

3 不可視の者 …… 42
4 凝結意思 …… 54

CRACK 2 …… 75

5 破屋と夢死 …… 77
6 『黒龍舎』の圭子 …… 92

CRACK 3 …… 106

第一章

7 光のガレリア …… 109
8 震駭魔 …… 125

CRACK 4 …… 139

9 脳内宇宙の牢獄 …… 146
10 **超越推理小説『赫い月照』**

第一回　覚醒の時 …… 161

1 カタストロフィーの夜 …… 177
2 密室心理 …… 193

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

3 推理の位相幾何……206
4 超越推理小説『赫い月照』
第二回　K655号殺人事件……221
CRACK5……237
5 螺旋隧道……242
6 超越推理小説『赫い月照』
第三回　二酸化窒素の亡霊……257
7 函詰めの夢魔……268
8 超越推理小説『赫い月照』
第四回　有蓋貨車と猫……280
CRACK6……296
9 マグネタイト・テープ・マーダー……300
10 超越推理小説『赫い月照』
第五回　磁気帯殺人……312

第二章

1 時計の中の右手……325
2 妄想円舞……337
3 雨夜の手錠……355
4 綾吊り人間……370
CRACK7……383
5 殺意の末裔……388
6 超越推理小説『赫い月照』
第六回　予定調和の夜……400
7 獣耳の鬼……413
8 断層の顔……428
CRACK8……444
9 超越推理小説『赫い月照』
第七回　死の王国……452
10 第二次元の果実……467

第三章

1 超越推理小説『赫い月照』
第八回　夢魔の逸脱……479
2 森霊現象……493
3 魚のなる木……507
4 あくむはふたたび……522
CRACK9……536
5 猫追い人……543
6 円環の死……556

7 亜鉛の味……570
8 イエロー・アイズ・マーダー……580
CRACK 10……601
9 超越推理小説『赫い月照』
第九回　人間貯蔵庫……608
10 旋回密室……621

第四章

1 超越推理小説『赫い月照』
第十回　無題……636
2 暗号円盤……642
CRACK11……665
3 六角堂にて……671
4 テ(ン)ジョウの死者……686
5 象牙の密室……699
6 ビーン・バヨグ事件……715
CRACK12……729
7 人形語り……735
8 仮作の首……752
9 虚人の論理……765
10 黒獅子館の邂逅……780

終章

1 グリフォンの羽根音……795
2 魂の死……809
3 化生のもの……819
4 髑髏が銜える……826
5 禁断の夜……843
6 探偵の終焉……852
7 血飛沫の舞う時……866
8 超越推理小説『赫い月照』
第零回　連続殺人方程式……876
9 非現実の現実……881
10 タンク山彷徨
または
永劫の振子……896
解説　笠井（かさい）　潔（きよし）……908

赫(あか)い月(げつ)照(しょう)

けれど、一人の人間の狂気が、そう簡単に一個の生命の行方を左右したりできるものですか。

山下京子

序 章

1 異人の獅子

夜の濃い群青色の空に貼り付いた赫い満月から、青白い燭光のような月明りが、入り組んだ木々の枝越しに降り落ちてくる。

深い森を斑に染める、衛星からの反射光。

その赫と青の組み合わせは、人の体内を走る静脈と動脈を思わせて、辻圭子（つじけいこ）の横腹あたりの肌をさわさわと粟立たせた。

ざくり。

ざくり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ざくり。

少しゴムの緩んだ白いソックスと卵黄色をした運動靴を履いた足を前へ出す度、夕刻に止んだ雨のせいでまだ柔らかい小石混じりの地面に靴底が三センチばかり沈み込む。八月の熱帯夜は、十三歳の少女の前髪を滲む汗とともに艶やかな額に付着させ、羊歯（しだ）の繁茂する藪の間の細い山道に、湿った木の香を充満させていた。

ざくり。

ざくり。

ざくり。

規則的に立ち昇る圭子の足音は、十メートルほど前方を先行する兄の耳には届いていない。悠二（ゆうじ）は、その幅広の背を一つ年下の妹に見せながら、無防備な歩みを進めていた。森の斜面に形ばかり刻まれた小道を、動歩行のできる二足機械人形のような、単調なリズムで歩いていく。降りかかる月光が少しよれたカッターシャツの輪郭を白く光らせ、幽かな影を細かく崩れた花崗岩の散らばる地面の上でゆらゆらと揺らめかせる。妹につけられていることに、兄は些かも気付いていないようだった。

やがて唐突に道を外れ、悠二は灌木の茂みの中に分け入った。太い松の木の陰で、圭子はその木肌のざらつきを指先に感じながら少しの間待った。

胸の鼓動が耳の奥の方にまで伝わって、小さな音と疼きを刻んでいる。その早急さを鎮めようと息を飲み込んだ圭子の喉が、小鳥の囀（さえず）りのように小さく鳴った。腕時計をしてくる余裕

などなかったので、時間が判然としない。一分ほどがのろのろと過ぎたような気がした頃、圭子は木の陰から出て、兄の後を追うため茂みを分けた。

出来るだけ音を立てないよう心を砕きながら下草を踏んで進んでいくと、不意に開けた場所に出そうになり、圭子は足を止めた。森の中に、蟻地獄の巣のような直径十メートルくらいの浅い擂り鉢状の土地がある。その中央、蒼く燐光を発しているように見える砂の上に、棒を飲んだ如く立っている悠二が見えた。

僅かに眉根に刻まれた皺と、飴のような滑らかさを見せる痩せた頬。濃い赤銅色の量の多い髪が、俯いた額に流れ落ちている。どこかで、糸が切れたような猫の鳴き声がした。

やがて悠二は擂り鉢の縁に近付き、屈み込んだ。息を殺して見つめていた圭子は、藪の中から砂の上に、人の足が二本突き出ていることに気付いた。

カスタード・クリームの色をしたゴム底が、逆八の字形にだらしなく開いている。水色の平靴の向こうには、白いソックスが続いていた。悠二はその足首を両手で摑み、ゆるゆると後退した。足に続き、草叢を開いてぞろりと出てきたのは、ブレザーとプリーツ・スカートの制服を着た一人の少女だった。擂り鉢の中央まで少女を引き出すと、悠二は身を起こして、砂の上に横たわったその肢体をじっと見つめた。

制服は、圭子が日頃着ているものと一緒だった。年齢は悠二と同じくらい……というより同級生に違いない。兄妹が通う兵庫県立潮見台中学校二年生の女子生徒の一人が突然行方不明になったのは、今から二日前のことだ。その一週間ほど前にも、隣の区の女子中学生が一人、姿

を消していた。

砂の上の少女は、肩までの直毛と両腕が引き摺られたせいで頭上に伸び、逆立ちでもしているように見える。そのほっそりとした顔には、周囲の空間に満ちた月光の影響を差し引いても、生気も血の気も全くなかった。閉じた目蓋と目の縁が、流れたマスカラを思わせて薄く黒ずんでいる。単なる肉の裂け目と化した唇が、小さく開いていた。

腐乱した魚のように動きのない目で、悠二は横たわった少女を長い間見降ろしていた。それから肩から斜めにかけている黒い鞄を下ろし、砂の上で金具を開いた。中から取り出したのは、一振りの帯鋸だった。銀色に光るアームとオレンジ色の木製の柄に支えられた、青黒い金属の歯。悠二はそれを顔の前に掲げて、珍しいものでも見るようにしばらく眺めた。兄の正面に潜んでいる圭子には、その表情に欠ける面差しがよく見えた。

とく。

とく。

とく。

圭子の耳の奥で、血が脈打っている。やがてそれに、悠二が少女の首を帯鋸で切り落とす音が重なった。

ざくり。

ざくり。

ざくり。

少女の乳色の首には、顎の下から耳の後ろにかけて、紫色の筋がぐるりと一条入っている。悠二が前後に動かす鋸は、その筋を切り取り線にでもしているように、肉の中に沈み込んでいく。草いきれの中に身を隠しながら、圭子の視界は次第にぼやけていった。全身が熱くなり、蟀谷(こめかみ)から汗が一筋、頬の方へ流れ降りていくというのに、体の方は雪の中にでもいるように震えが止まらない。

少女の細い首は、それを蹂躙していく鋼の歯の前に、あまりにも無力だった。信じられないような短時間で、帯鋸はその頭部を胴体から分けた。砂の上に少量の黒い血が広がる。擂り鉢の中央で、悠二は人の姿をした蟻地獄そのものだった。人間を捕食する、巨大なウスバカゲロウの幼虫だ。

帯鋸を置いて、悠二は両手で少女の頭を掲げ持った。その下から黒いコンデンス・ミルクのような液体が一筋伸びる。しゃがんでいた圭子は、いつの間にか夏草の上に腰を落としていた。光の斑点が目の前を浮遊し始め、世界がぐるぐると回って、喉の奥に苦いものが込み上げてくる。

悠二は少女の頭を砂の上に立たせ、無遠慮な視線を浴びせた。次に、膝を立てて体を起こし、絵の出来具合を確かめる画家のように少し離れたり、また近付いたりしつつ、子細にそれを観察した。少し下がり気味になっている目蓋が、内面の陶酔を表出しているのだろうか。人間の命の終焉を楽しんでいる、死の天使のようだった。

しばらく眺め回して満足したらしく、悠二はまた膝をつき、今度は少女の髪を片手で摑んで

頭を持ち上げ、それを黒い鞄の中に無造作に入れた。置いていた帯鋸も後から入れて、鞄の蓋を閉じ、悠二は立ち上がった。それから首のない少女の亡骸の両手を摑んで、元の草叢の中まで引きずっていった。

やがて擂り鉢へ戻ってきた兄が自分の方へ歩いてくることに気付いて、圭子の心臓が跳ね上がった。座り込んだまま下草をかき分けて、圭子は元いた場所から数メートル離れた。次第に早くなってくる息遣いを殺して俯いていると、すぐそばを跫音が通り過ぎ、そして遠ざかっていった。口の中に溜まっていた唾を飲み込んで、圭子は顔を上げた。

藪が幽かに揺れている。しかし悠二の姿はどこにもなかった。圭子は急いで立ち上がり、来た途を逆に辿った。細い山道に戻ってみると、往路と同様、十メートルほど先を帰っていく兄の後ろ姿が月照の中に滲んでいた。圭子は歩みを再開した。

耳の奥の脈動が膨張して、もう自分の跫音も聞こえない。少女の頭を鞄の中に秘めたまま、悠二は木影の間を歩いていく。このまま家へ戻るのかと思うと、圭子は心に何か大きな穴のようなものが穿たれた気がした。もし兄がそ知らぬ顔であの恐ろしいものを家に持ち帰るようなことがあれば、自分は発狂して、片側の脚をもぎ取られた斑猫（はんみょう）のように、不様に地面を這い回るかもしれない――ぼんやりそんな思いを巡らせていると、悠二が急に道を逸れた。

駆けるように、山肌の斜面を降りていく。しばらくスニーカーの底で地面を削り続けた悠二は、やがてアスファルトの道路へ出た。赤土を舗装の上に撒き散らしながら悠二は立ち止まり、肩の鞄をかけ直して左右を見た。

車一台がやっと通れる幅しかない狭い坂道。急な傾斜がカーブし、昇った先も降りていく先も、灰色のブロック塀に阻まれていて目が届かない。塀の中には、ヨーロッパ風の石造りの異人館がいくつも並んでいるはずだ。

この神戸市須磨区潮見台一帯は、元は雑木林しかなかった所を、昭和初期にR・W・ハートという英国人が私財を投じて買収し、外国人のための住宅地として整備した所だ。ハートは戦前の神戸で著名だった貿易会社『オリエント商会』の総支配人だった人物で、西欧諸国と日本との貿易関係を促進するためには、快適な外国人専用住宅が必要と考えた。

その宅地開発事業は第二次大戦で一時中断し、ハートも英国へ戻ったものの、戦後、帰神して整備を再開し、昭和二十年代半ばに住宅地は完成した。それから五十年近くが流れた現在も、多くの洋館、異人館が建ち並び、総数百五十人ほどの外国人が暮らしている。

旧名、鉄輪（かなわ）山――現在はハート山の斜面に貼り付くように置かれた街は、細い道が複雑に入り組み、木立ちの間から覗く西洋風のスレート屋根といった風景も手伝って、少し迷宮じみていた。時折、碧眼の親子などともすれ違い、どこか高級感の漂う北野の異人館街とは異質の、いわばヨーロッパの下町にでも迷い込んだような雰囲気がある。圭子の母は学生の頃、異人館の敷地の中のテニス・コートで、外国人のために球拾いのアルバイトをした経験があると話してくれたことがあった。その住宅地の一番奥、つまりハート山の頂上に、街の創設者の墓碑が設置されている。R・W・ハートは、このハート・タウンの完成数年後に病死した。

人気（ひとけ）の絶えた道に突っ立っていた悠二は、やがて坂を昇り始めた。足元のアスファルトはす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com